



海の生活誌(第一回)

潜水漁

Diving fishing
by Takashi Makabe

五月一日、いわき市周辺では、ウニ、アワビ漁が解禁になります。この漁は五ヶ月までに限られ、漁業権は各採鮑組合が持ち、組合員にのみ、潜りによる採取が許されています。先日、その一人である小名浜下神白の馬目秀男氏に話を伺いました。馬目氏は昭和十七年生まれ。この潜水漁は世襲により受け継がれ、馬目氏も十七歳から、漁を始めました。起床は、午前三時頃。五時三〇分に、港に出向き、六時三〇分、小型和船で組合員が一斉に出漁します。採取量はウニ二十kg、アワビ二〇個で、小さいものは採取しないと決められており、約一時間で作業が終わります。現在はウエットスーツにフィン、空気ポンペを使用しますが、



▲潜水漁の様子
Scene that dive to catch abalone and sea urchin

馬目氏が潜り始めた昭和三十年代頃は、罎一つと海中メガネのみの素潜り漁でした。当時は一息四〜五〇秒、水深三〜五m位までの潜水で、採取量も限られていました。また、体も冷えるので、浜に戻って、暖をとる、休みながら午後二時まで漁をしたそうです。しかし、昭和四〇年代後半から、現在のような器具が使用され、ウニ・アワビが無制限に採られました。加えて、海岸線の変化もあり、資源量が減少し、様々な規制により管理され、今に至っています。

馬目氏のように、海に潜り、ウニやアワビ、サザエ等を採取する人をアマ(海女・海士)と呼びます。青森から沖縄まで、ほぼ全国に分布し、日本海側では北陸地方、太平洋側では千葉県安房、静岡県伊豆、三重県志摩に集中しています。一九九六年の三重県の調査によれば、志摩において、約二一〇〇人が潜水漁を行っている」と報告しています。

では、アマには、どのような歴史があるのでしょうか。『魏志倭人伝』(三世紀後半)に「人好んで魚鮫を捕え、水に深淺となく皆沈没して之を捕る」とあり、『古事記』『日本書紀』にも、アマに関する記事が見られます。また、『常陸国風土記』の密筑(日立市)の項にも、「石決明、棘甲羅、魚貝等の類、甚多し」とあり、近県地域でも潜水漁が行われていたと推測できます。このように古代から、

近世、近代と、アマは、様々な史料に記録され、『明治十二年水産旧慣調』では、当時の小名浜付近の海士の姿を絵によってうかがい知ることができます。

また、記録ばかりではなく、考古学の視点からも、その歴史を探ることが出来ます。いわき市小名浜古湊の寺脇貝塚から、縄文時代晩期の鹿角製尖頭器が発見されました。それとともにアワビの殻が多数出土し、形態、使用痕、機能等から考えて、これはアワビをはがす道具と考えられます。普通、アワビは干潮時にあらわれる場所や砂中にはすまず、水面下五〜六m位の岩礁に固く張り付いていることから考えると、この地域でも縄文時代には潜水漁が行われていたと言えるでしょう。また、最近の研究において、各地の貝塚から発見される縄文人骨に残る外耳道骨腫は、潜水漁によってできたものであり、それが、すべて壮年男性に限られているという報告がありました。現在、アマの分布の特徴として、日本の中央部では概して海女(女性)が多いのに対して、東北部と西南部では、海士(男性)が多いとい



▲アワビを採る道具(鹿角製尖頭器)
Abalone crowbar



▲ナサシを持ってアワビを採る様子(『明治12年水産旧慣調』より)
Catching abalone with a abalone crowbar "Nasashi"

う傾向があります。日本の中央部においては、海士よりも有利な漁業が発達し、男性がそれに吸収され、その隙間を埋めるように海女が出現したのかもしれない。実際、いわき市周辺でも、以前、勿来地区で女性のアマがいたという事例はあるものの、ほとんどが男性で、馬目氏も昔から海女はいなかったと話しています。

このように、古くから行われてきた潜水漁も、近年では、高齢化が進み、馬目氏の属する採鮑組合では最高齢者が七十五歳だそうです。しかし、体力の続く限り、海に潜ろうとする姿勢には、サラリーマンの職業観とは違った海士の誇りと意気力強さを感じます。そんな潜水漁を現在に受け継ぐアマたちがいるからこそ、おいしい味覚を賞味できるのであり、また当館においてはタッチングプールで、来館者にウニを触っていただけなのです。

(学習交流課 真壁 敬司)